

気がつけば

函館市民に
なつていた。

Vol.7

消えるばかりでは
なかつた町並み

移住を決める理由とは

ほんの数年前までは、「移住」といっても人口減少に悩む一部の自治体だけが関心を寄せるテーマだったようになりますが、今や地方創生担当大臣などが置かれるくらいで、地方への移住が全国民的なテーマへと浮上してきた感があります。

テレビでも、第一の人生を充実させたため地方に移住したりタイア層や、地方で起業した若者を取り上げた番組が増えているようです。

何でもそうだと思うのですが、メジャーなテーマになつてしまつと、それを裏付ける「論」のようなものが登場します。移住にしても、地方に行けば家賃や物価が安く暮らしやすい起業もしやすい、通勤ラッシュから解放されるなど、合理的な理由をつけてそのメリットが論じられるよ

うになつきました。

それに引き替え私などは、ただただこの町が好きになつた、肌に合うような感じがしたという理由だけで移住しました。そこには何の合理性もありません。むしろがままや贅沢のようなものかもしません。

もちろん誰にだって生活がありますから、経済性や合理性も無視できません。だけどできる限り、そんなことより自分の肌に合つ町に暮らせた方が幸せなように思ひます。

それに「移住者に来てもらつ」という観点で言ひますと、数字や理屈で説明できるメリットで町の魅力を評価するなり、もつと条件の良い町が現れた場合、簡単に田移りされるのではないかと思ひます。

理屈では計れないもの

町が好きになつて移住したという私の思いの中には、函館には歴史の生き証人のような古い建物が、自然なたたずまいで残つてゐるという点がありました。

ただ、移住してからのわずかの間に、そいつた建物が一つ減り、2つ減りと、私にとっての函館の魅力が薄れていくようでした。もちろん建物の持ち主には、持ち主なりの事情

があるはずですから、我なんかにと

やかく言う権利はありません。残念だけれど、これが時代の流れであり、歴史的な町並みは減ることはあっても増えることはないと観念していただけですが、何と最近、大町で歴史的な建物が甦りました。

しかもそれは、

消えた建物が再建されたというのではありません。トタン屋根に、外壁はごく普通のモルタル塗り、借り手がないければ取り壊される運命だつた建物を、ある方が調査したところ、モルタルの下は土蔵造りで、明治27年開所の「函館米穀塩海産物取引所」の監査役も務めた米穀・海産物委託問屋・松橋象作の店舗だつたことがわかりました。これほどの建物を取り壊すのは惜しいところで、その方が貸借契約を結び改修工事を行つたところ、出てきた棟札から明治35年の築であり、明治40年の大火でも類焼を免れた数少ない建物の一つであることもわからました。

限りなく当初の姿に近い形に戻さ

れた防火造り外觀は意匠性の高い鏽絵も再び姿を現し、内部の太い梁、ケヤキの洋風階段なども相まって、さぞかし往時の函館商人は羽振りがよかつたのだろうと、好奇心がかき立

てられます。

元の姿に戻すための手がかりも限られていたと聞いていますし、工事の費用も半端ではなかつたと思いますが、自分の所有物にならないにも関わらず、それほどまでにこの歴史ある建物の復元に打ち込まれた。その思いもまた、決して経済性や合理性などで説明のつくものではないことは想像に難くありません。



往時の姿が甦った明治35年築の松橋商店
(大町・緑の島入口前)

★プロフィール★

おおにし つよし
大西 剛さん

大阪出身。

2011年秋より、函館に移住。
「新はこだてライブラリ」を設立し、函館発の電子書籍・印刷書籍の出版に取り組む。

2012年には、2008年秋から
の函館通いで感じた町の魅
力を綴った「新函館写真紀行」
を出版。

現在は、移住サポーターとし
ても活躍している。

